



日本語キーボード

気になる配列

日本で販売されているパソコンは、国産メーカーの製品でも外国メーカーの製品でも、日本語キーボードを標準装備している。一昔前の米国製品には英語キーボードが搭載されていたこともあったが、いまでは何と言っても日本語キーボードが標準である。

日本語キーボードと英語キーボードとは、一見似ている。英字と数字の配列は両キーボードともに同じである。しかし記号の配列が大幅に異なる。またキーの数も違う。配列の違いが混乱を招く場合がある。タッチタイピングができる人、つまりキーボードを見ないで入力できる人は、指がキー配列を覚えている。英語キーボードのつもりで日本語キーボードを打てば困惑するのが当然だ。

一方で、どのようなキーボードでもマスターできる人がいる。こういう達人は、キーボードの違いは気にならず、自動的にスイッチできるそうだ。

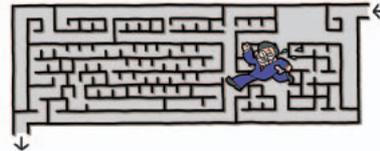
高価な英語キーボード

私は英語キーボードに慣れている。残念ながら、私はキーボードの達人ではない。それで日本語キーボードに問題を感じる事が多々ある。

ワークステーションや、デスクトップのパソコンならば、市販されている外付けの英語キーボードを購入して付ければいい。問題はすぐに解決する。同じ英語キーボードを、ラップトップのパソコンにも外付けすることができる。私は車で移動するような旅行時にはキーボードも運ぶ。しかし常時携帯するのは面倒である。

そこで窓の杜  にあるキーボード関係のソフトを利用して、キーの配置を変更する。これで基本的な機能は満たされる。ただし日本語と英語ではキーの数が異なる。完全には代替できない。日本語キーボードの中には、右端に近いキーの幅が狭くなっている機種がある。それが気になってもソフトでは直せない。

友人の中には東芝ダイレクトで海外モデルを購入したり、IBM のPCドックで英語キーボードに交換したりする人がいる。このような道が残されているのは誠にありがたい。ただし費用が安いとは言えない。



子供にどちらをすすめるか

キーボードについては、以前の「新・社会楽」で一度取り上げたことがある(第31回『キーボード談義』97年8月号)。その当時と比べると日本語キーボードの普及がめざましい。私は英語キーボードに慣れているので、どうしても日本語キーボードの欠点が目につく。たとえば、日本語キーボードの右手の受け持ち範囲は、英語よりも一列多い。指の負担を減らすほうが楽になるような気がする。

一方で、私の友人の中にはカナ入力をする人がいる。生徒にカナ入力を教えている学校もある。もしカナ入力をするのであれば、日本語キーボードを選択することになる。

国際化の視点で言うと、ハングルが刻印してある韓国のキーボードも、基本漢字が刻印されている台湾のキーボードも、英語キーボードと同じ配列だ。タイのキーボードもタイ文字が刻印された英語キーボードである。これからの日本の子供は国際的に活発に交流するはずだから、英語キーボードの配列をマスターするほうがよいと考えられる。

他方で、ヨーロッパの現状を見ると、これは国によって相当に異なる。アクセント記号の配置だけでなく、英字に相当する配列にも種々ある。英語キーボードが万能でないことも事実である。

今後のマルチメディア時代においてもキーボード入力は相変わらず重要である。もっとキーボードに注目して、大いに議論すべきだと思う。

 www.forest.impress.co.jp

Illustration: Harada Kaori



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp